

TRUTH AND URVERDRÄNGUNG
IN LANGUAGE LEARNING

— a Lacanian Reading of Davidson's Radical
Interpretation Theory.

Osamu Ueno

ABSTRACT: The author by applying the Lacanian notion of “the Other”(l'Autre) to Davidson's Radical Interpretation Theory proposes a primal T-sentence hypothesis — ‘ ϕ ’ is true iff ϕ — to make account for child's language learning, and draws the conclusion that truth such as defined in Tarskian fashion would entail “Urverdrängung” on the part of learning child, who so learning is supposed to identify itself with the truth condition of the primal token addressed by the Other viz. mother who bears the obscure authority of truth witness.

言語習得における原抑圧と真理

—デイヴィドソン、ラカン

上野 修

「他者による発話の解釈者でない限り、生物は思いを持ち得ない。」

(デイヴィドソン「思いと語り」)

次の文を観察せよ。

「雪は白い」が真なのは、雪が白い場合その場合に限る。

自明である。あまりの自明さに不安になるほどだ。

ここで示されているようなトリヴィアルな「真理」はしかし、生まれ落ちた子供が言語を習得するという、いまひとつの謎めいた事実に深くかかわっている。このことにデイヴィドソンは十分気付いていた。そしてそれよりもやや早く、海を隔てて、ラカンもまた同様の問題に取り組んでいたのである¹。両者の影響関係はおそらくないだろう。ドナルド・デイヴィドソンはアメリカの分析哲学、ジャック・ラカンはフランスの精神分析運動と、それぞれ独自の文脈のなかにいる。両者を関係づけて論じたものもほとんどない²。にもかかわらず、両者が同じ問題のなかで図らずも出会っていることは間違いないと私は思う。それは、言語との原初の遭遇において生じるであろう、他者（しかしそれはいかなる他者だろうか）・真理・主体の関係という問題にほかならない。

【デイヴィドソンの根元的解釈論】

子供は初めから言葉を知っているわけではない。母親のような身近にいる他者から学ぶのである。しかし、この他者もまた初めは他者から言語を学ぶほかなかったのであり、そしてその他者もまた…というふうと考えていくと、それだけですでに、人間にとっての言語の途方もない他性が浮かび上がってくる。経験的観察は、子供がかなり早い時期から母親の発語の抑揚を模倣すること、生後10カ月前後にすでに一語文らしきものを発しはじめることを教える。またチョムスキーのように統語能力の生得性を主張する理論もある。だが、たとえば「ユ・キ」という特定の語列が雪を意味するということは生得的な文法構造では決まらないし、音声模倣の観察がそうした意味理解の機構について何か教えてくれるわけでもない。問題は、ある意味ではっきりしている。子供が、手持ちの意味資源がまったくゼロのところから言語習得を始めるということは、いったいどのようにして可能なのか？ 言語の起源の問題と同様、こういう問題を問うことは無謀であろう。が、たとえ到達不可能でも、謎への正しい接近の仕方というものはあると思う。われわれに必要なのはある種の論理的な考察、すなわち、それがなければ言語の意味理解が不可能となるような要件に関する、論理的な考察である。

われわれはデイヴィドソンの「根元的解釈」(radical interpretation)の理論を有力な候補として考えたい。以下、しばらくは彼の『真理と解釈』所収の論文をもとに考察を進める。

言語がわかるということは、個々の言語表現(文)に適切な解釈を与えることができる、ということに等しい。そのために必要な装置として、デイヴィドソンは冒頭に挙げたような、タルスキ流の真理定義を提案する。

「雪は白い」が真なのは、雪が白い場合その場合に限る。

一般的に書けば、

‘S’が真なのは、pの場合その場合に限る。

真理を定義するこういう形の文を、真理 (Truth) の頭文字をとって T 文と呼ぶ。‘S’ は解釈の対象となる言語の語列からなる文 (sentence)。p はその文が真になる条件、すなわちその文の真理条件である。よく見ると、文 ‘S’ の意味が前もってまったくわからなくても、それが真と見なされる条件 p さえわかれば、‘S’ の意味解釈が可能となることがわかる。

誰かが「ユ・キ・ワ・シ・ロ・イ」という語列からなる文を発するとする。日本語を知らない人でも、発話者が雪が白いときにのみそういう文を真と見なしていると突き止められれば、その文は雪が白いという意味だとわかるはずだ。つまり、T 文が仮定できれば、あとはこの仮定が正しいかどうか経験的にテストするだけで、文 ‘S’ の意味が得られるのである。

もっと発話状況に即した形に T 文を書き改めてみよう (デイヴィドソンのあげている例)。

‘Es regnet’ が、時刻 t に x によって話されたとき、それがドイツ語で真であるのは、t において x の近くで雨が降っている場合その場合に限る。

こういう T 文を仮定する。そして、もしドイツ語共同体に属するクルトさんが、ある土曜日の正午に ‘Es regnet’ を真と見なし、かつその土曜日の正午にクルトさんの近くで雨が降っているなら、この T 文が真であるらしいということの証拠になる。もし、それ以外のドイツ語を話す多くの人々についても、近くで雨が降っているときに限って ‘Es regnet’ を真と見なしているらしいと突き止められたら、‘Es regnet’ は雨が降るという意味なのだということはドイツ語を知らない人にもほぼ確実にわかる。文の意味がわかれば個々の単語の字義的な意味も見当がつく³。

これが「根元的解釈」の基本的なアイデアである。この理論は子供の言語習得を考えるのにたいへん都合がよい。なぜなら—

1. 「根元的」という語が示すように、この理論は言語のまったき非共有を仮定する⁴。大人のあいだに生まれ落ちた子供も同様の状況から出発しなければならない。

2. この理論は話す能力よりはむしろ「他者の発話を理解する者」という観念を本質的なものと見なす。話し手自身、つねにすでに他者の解釈者でなければならないと考えるのである⁵。実際、アインシュタインの例が示すように、知的に優れていても言葉が遅い子供はいる。子供は自分から言葉を話し始める以前に、大人たちの発話をある程度理解しているらしい。他者による発話の解釈が本源的であり時間的にも先行するというこの事実、デイヴィドソンの理論は見合っている。

3. この理論は、言語能力について「われわれが現に何を知っているのか」ということは問題にしない。「われわれが現にそうしていることを知る」ことだけが問題なのである。他者による発話の解釈を可能にしているのはどのような理論か？そしてそれを裏付けるどんな証拠がありうるのか？これは「二重に仮定的な問い」であって、解釈者自身の知識には訴えない⁶。このことは、子供のときにそれと知らずに解釈ができるようになってしまい、そのまま、どうしてできてしまうのか知らずに大人になってしまっている、というわれわれの事実にあてはまる。

4. この理論は、「意味」という概念に訴えない。言葉が世界のなかの何かを指示するとはどういうことか、という意味論的概念は不要である。T文の形式を見れば、「文‘S’はpを意味する」というふうにはなっていない。文‘S’の解釈に必要なのは、もっぱら「真である」という原始概念のみであって、しかもそれが「どういった真理なのか」を知っている必要すらない。実際、タルスキ流のT文は真理を内包的に定義するのではなく、およそその言語で語られる真なる文一切の外延の一部を実質的に定義しているのである⁷。このことは、意味的資源ゼロのところから出発する子供の状況にあてはまる。子供は前もって、世界について、あるいは意味について、何も知っている必要はない。必要なのはただ、身近の大人が声を発するとき何かを真と見なしている、という気づきだけである。

5. この理論は「翻訳」という概念すら前提としない。(デイヴィドソンの「根元的解釈」というアイデアはクワインの「根元的翻訳」(radical translation)をヒントにしているが、「翻訳」が「解釈」に変わっている)。タルスキにとって問題だったのは、ある理論言語における真理概念をどう定義

するか、ということだった。そこで彼は、T文「‘S’が真なのはpの場合、その場合に限る」のpを対象言語の文‘S’のメタ言語への翻訳と見なし、翻訳概念を自明の前提に据えてそこから真理概念に至ろうとした。自然言語の意味理論を企てるデイヴィドソンは、この方向を逆転させる。むしろ「真理」を原初的な概念として受け取り、そこから解釈の説明に向かうのである⁸。しかも、根元的解釈は対象言語からメタ言語への「翻訳マニュアル」のようなものではない。もしそうなら、自分自身の言語の解釈という問題が残ってしまう。だから「対象言語のための解釈の理論は、既知の言語に関する解釈を構造的に明らかにする理論と、未知の言語から既知の言語への翻訳システムとの融合の結果」と見なされねばならない⁹。この論点は微妙な問題をはらんでいるが、かつて子供であったわれわれ自身の言語習得を考えるには必要な方向である。実際、対象言語からメタ言語ないし自国語への翻訳理論というのなら、自国語そのものを習得しなければならぬ子供の場合には役に立たない。

6. この理論は、再帰的に無数のT文の解釈を生成すると想定される。話し手が真と見なす文についてT文を仮定し、その正しさが検証できればその文の意味がわかる。この試行錯誤はまったくめくら減法というわけではなく、全体論的な方向付けのもとに置かれる。話し手である他者はそれなりに一貫した信念の体系に基づいてしかじかの文を真と見なすはずだから、T文の総体が話し手の真と見なす態度に適合するように、各文の解釈を方向付けていけばよい¹⁰。おそらく子供もそうするのだろう。子供は母親の知の総体を先取りのに想定し、それを次第に埋めたつもりになりながら、そのつどそこからフィードバックして個々の発話の解釈を進めていくと考えられるからである。

さて、それではデイヴィドソンの「根元的解釈」の理論をわれわれなりに、子供の状況に当てはめてみよう。子供があげる声を捉えて母親が言う。

「Aちゃんは、おなかがすいたのかな」。

「…?!」

「そうなのね」。

「母親言葉」の観察が示すように、しばしば母親は子供の立てる声を文に見

立て、子供自身がこの文を発しているかのように振る舞う。子供は自分が言っていることになっているらしいその文「オ・ナ・カ・ガ・ス・イ・タ」を、その真理条件によって把握するだろう。鍵は母親の肯定的な態度である（おそらくここに真理の原始概念の起源がある）。子供が母の声の抑揚を真似て返すと、母親が「そのとおり」と態度で同意してくれる。「お前の言う文は真である」と母親が肯ってくれるのを見て、子供は何が「そのとおり」なのかを当て推量するのである。この解釈構造をT文の形であらわせば、

「オ・ナ・カ・ガ・ス・イ・タ」が真なのは、私のおなががすいている場合その場合に限る。

「そのとおり」に当たるのは、子供の生理状態と欲求であることが多いだろう。実際、子供自身の言っていることになる文として母親の与えるものの多くは、空腹・排泄・睡眠といった反復的な生理状態と、そこから来る欲求を言い表す文である。そこで子供は母親の肯定的態度と自分自身の状態だけをもとに、他のいかなる情報もなしに文の真理条件を推量できるだろう。

もちろん、「おりこうさんね」のような、母親自身が言っていることになる文も考えられる。が、解釈構造は変わらない。

「オ・リ・コ・ウ・サ・ン・ネ」が真なのは、私がおりこうさんになっている場合その場合に限る。

こういう文の場合、生理状態や欲求だけでは推量できないかもしれない。しかし子供はとにかく自分が母親を喜ばせるような場合に限り母親がその文を真と見なして発することぐらいいは察しがつく、と考えることはできる。それが「オ・リ・コ・ウ・サ・ン・ネ」の最初の、おぼろげな意味である。

いずれにせよ、子供はやがて、文の語列を真似て自分の言葉として返すことさえできるようになるだろう。もちろん、誤った言葉遣いは文の真理条件をみたさないものとして、親から訂正される機会にいつも開かれている。

このように、子供は他者がある文をいつ真と見なすかということ、すなわち

文の真理条件を唯一の手がかりに、言語を習得するものと考えられることができる。「真理」を中心的な原始概念にすえて、そこから「意味」に至るデイヴィドソンの根元的解釈の理論に、このプロセスは非常に似ていると言わねばなるまい。

【原始T文仮説】

とはいえ、われわれが考察しようとしているのは、子供と言語の原初的な遭遇という場面である。最初に真理の原始概念に気付くとき、子供はまだいかなる言葉も意味も知らない。子供は母親から最初に文として聞く言葉を、たしかに真なる何らかのしるしとして受け取るのだろうが、まだその真理条件に当たるものをまったく知らない。そこでわれわれはデイヴィドソンのタルスキ流T文をさらにラジカル化させて、空虚で純粋な、最初のT文を想定することしよう。それはこんなふうになるだろう。

‘ ϕ ’が真なのは、 ϕ の場合その場合に限る。

T文の形をしたこの文は、子供が生まれてはじめて言語の存在に気付く最初の文把握を示すものと仮定する。さしあたり「原始T文」とでも呼んでおこう。‘ ϕ ’は他者からやってくる意味不明の、子供にとっては最初の真なる「文」、われわれがもはや決して思い出すことのない原初の語列、特定の意味内容を欠いた「シニフィアン」（意味するもの）とでも呼ぶべきものである。同じしるし ϕ が真理条件のところ引用符を外されて現れるのは奇妙だが、子供に与えられる最初のトークンはこれしかないと想定されている以上、仕方がない。それにこの形式は、真理とは「引用符外し」のことだというタルスキ的真理概念の直観を最も単純な形であらわしてもいる。

さて、とにかくこれが根元的解釈の原始パターンだとすると、子供は原始T文の右側の真理条件 ϕ を自分のことだと理解するにちがいない。なぜなら、母親がまなざし・語りかけ・頷きかける「ここ」に相当する子供自身が、その語りかけ‘ ϕ ’を真となす条件でないとしたら、この語りかけという言語的遂行

そのものが子供にとって理解不能になるからである。それゆえ、言語の意味存在への気づきが生じるなら、必ず子供は真理条件 ϕ に自己同一視しているものとするほかない。より正確に言うなら、母親の語りかけの原始的な真理条件として自らを見出すまでは、赤ん坊ははまだ単なる一個の生物でしかなく、ここではじめて赤ん坊は自ら何かを語るべき「主体」として出現する、ということである。いったんそのように子供が「主体」として創設され、母親の語りかけの恒常的な真理条件の場所として固定されるなら、前節で述べた「おなかがすいた」「おりこうさんね」のような解釈がこの固定点に参照しながら進展していくと考えるのはたやすい。

ところで問題は、原始T文における ϕ の反復である。双条件文を次のように書き換えると、問題がはっきりする。

$$T \text{ '}\phi\text{' } \Leftrightarrow \phi$$

これは形として「同音的真理」の理論に似ている¹⁴。もしそうなら、右側の ϕ を述べる言語は左側の ' ϕ ' を述べる言語よりも、T文での真理定義に最低限必要なだけ「上回って」いなければならない。ところが、いまは他者から与えられる最初のトークンとしての文だけを想定しているのだから、このことはこう言い換えることができる。すなわち、原初的な解釈のなかで子供が自己同一視する ϕ は、ある種の差異をはらんで双条件文の右と左に反復される。他者の言語はその初めから、この同じ差異をはらんで二重化されてのみ、言語として出現するのである、と。

子供はこうした反復における差異のなかで、主体としての最初の目覚めを迎えるものと推測される。その差異は、何ならラカン風に次のように言い表してもよい。

目の前のこの人はいま ' ϕ ' とやった。それはこの私ゆえに真なる発話でなければならない（さもなければ私は何ものでもなくなってしまうだろう）。それゆえ私はその発話の真理条件、 ϕ でなければならない。しかし ϕ とは何なのか？なぜこの人は私のことを ϕ だと言うのだろうか？

φが何であるのかさっぱりわからないこの私を…。

幼児がそんな原始T文など知っているはずがない、という反論は当たらない。そんなことを言うのなら、われわれ成人でさえ、自分がどのように言語の意味を知っているのか命題的な仕方知ってなどいないのである。知っていて為すことと、すでに為していることの構造を分析によって事後的に知ることとは別である。われわれの問いは後者であるのは言うまでもない。たしかに子供は自分のこうむっている差異を、こんなふう言葉に表すことなどできはしない。われわれが問題にしているのは、そののち子供が他者の言葉を理解しようとするたびに反復されると思われる、当人には言えない不易の真理-意味論的構造なのである。

【ラカンのグラフ】

デイヴィドソンの線に沿って進めてきた以上の考察はもっぱら仮定的なものであるとはいえ、臨床経験に基づいたラカンの精神分析理論と多くの点で符合する。とすれば、原始T文仮説に空疎なたわごと以上のものを、すなわち、真理との関係に置かれ、真理のゆえに引き裂かれた現実の主体に関する何らかの解明の鍵を、われわれは期待してよいだろう。

フロイトを継承しようとするラカンは、無意識の主体がいかにして成立するかを説明しようとした。ラカンの特色はそれを、言語に由来する「真理」概念との密接な連関のなかで行おうとしたことである。ラカンはしばしば「わけがわからない」と評されるが、思われているほど荒唐無稽ではない。むしろ以下の考察は、「わけのわからなさ」(obscurité)に理由のあることを示すだろう。

晦渋を承知で、主著『エクリ』からパラフレーズしてみる。ある日、子供は言語の存在に気付く。ラカンによればその「原初の言われたこと」は、話し手である他者(たいていは母親)に「わけのわからぬ権威」(l'autorité obscure)を授ける。それは「真理の証人」という権威である。こうして大文字で書かれるべき絶対的な他者、l'Autreが出現し、以後、この他者は「パロー

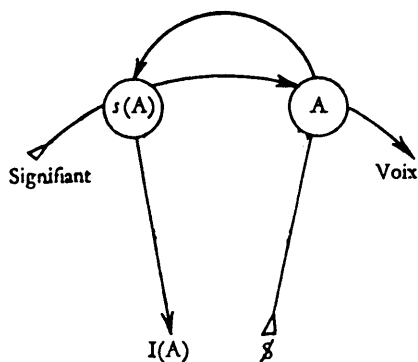
ルが真なるものと肯定されるために必要とされる次元」となる¹²。

ラカンの言おうとしていることは、根元的解釈の理論からすれば何も奇矯なところはない。実際、言語的な意味世界への唯一の突破口は、目の前の他者が文を「真」と見なしているという気づきであると推測される。だから「原初の言われたこと」とともに、母親が「真理の証人」として、子供がこれから知っていく意味の全体に対する全能の権威を帯びて子供の前に現れても不思議はない。

ラカンは続ける。この大文字の他者の全能をあらわす「徽章」(insigne) のような一個のシニフィアンを考えることができる。主体は「徽章」に自分自身の目印を見出す。これがフロイトの言っていた「一元特徴」(einziger Zug = trait unaire) である。それは「主体がシニフィアンから掴み取ってくる不可視のしるしを充当し、そうやって、自我理想を形成する原初的な同一視へと主体を譲り渡す」¹³。

これも、根元的解釈の理論から見れば理解できる。「一元特徴」は原始T文に現れる真理条件 ϕ にちょうど相当するものと考えればよい。子供は母の言うことが真であり、それが真なのは自分こそがその言われているとおりのものである場合その場合に限る、と気付くところからしか、言語的な意味の世界に入り込むことはできない。ラカンの言うとおりに、子供は自分自身の目印としての「不可視のシニフィアン」を、最初の文‘ ϕ ’の真理条件 ϕ でもって充当する。これが「一元特徴」なのである。そしてこの同一視は子供にとって、自分こそであったのだろうし、これからもそれなのだろう、という、「自我理想」の形成へと向かわせる。理解のために、ラカンが載せている「グラフ」の一部¹⁴を示しておこう。

オリジナルよりやや簡略化してあるが、見当はつく。これは子供と言語との原初の遭遇の図式なのだ。左から右へと弧を描いているのは「意味する語列」。すなわち「原初の言われたこと」が他者の声の形で横切っていく様子をあらわす。それをもう一つの弧が右下からやってきて突っ切り、弧を切り取って左下へと抜けていく。これは子供が言語の存在に気付く最初の動きをあらわしている。Aはおおよそ真なる文を生成するのに十分な「シニフィアンの宝庫」、真なる文の源泉である他者の場所をあらわし、s(A)は語列が終結して意味作用



が生成する地点をあらわす。右下の三角印は主体以前の、単なる生物としての子供と考えればよい。子供はそこから出発して他者の場所からシニフィアンを釣り上げ、意味作用の $s(A)$ をくぐって自我理想 $I(A)$ へと疎外される。このとき子供は事後遡及的に主体 $\$$ として出発点に現れる。主体 (sujet) をあらわす S に抹消線が引かれているのは、子供が他者の

言うことの中に入り込んで、あとで見るような自分でも「わけのわからぬもの」になっていることをあらわすためである¹⁵。

これで見れば、原始T文はラカンの「グラフ」に変換できることがわかる。文の意味はその真理条件なのだから、意味作用 $s(A)$ は原始T文に現れる真理条件 ϕ に相当すると言ってよい。これに子供が自己同一視すると、それはラカンの言う「一元特徴」となる。一元特徴になる $s(A)$ は、もともと大文字の他者の全能の「徽章」であったというのもよくわかる。 $s(A)$ という記号の中の A は大文字の他者のことで、意味作用 (signification) s が他者 A の「真と見なす」権威に全面的に依存していることを、この「徽章」はあらわしている。主体はこれによって真理条件への自己同一視へと譲り渡されるのである。

【真理と原抑圧】

われわれはデイヴィドソンの「根元的解釈」をさらにラジカルにして「原始T文」を仮定し、次いでこれがラカンの「主体」生成の図式に転換可能なことを見た。そこで、ここからはフリーハンドでデイヴィドソンとラカンを交錯さ

せながら、真理と主体がどういう関係になっているのか見ていきたい。

タルスキ流の真理概念の特徴を、今一度振り返ってみよう。

「雪は白い」が真なのは、雪が白い場合その場合に限る。

真理を定義するこうしたT文を見て、人は一種、異様な感じを受ける。そして、雪が実際に白いから「雪は白い」は真になるのだ、と考えたくなる。ところが、これこそタルスキが誤解としたものである。「実際に」雪が白いかどうかという問題は真理の意味論的定義には無関係である。さもないと、「雪は白い」が真なのは雪が白いことが真である場合その場合に限る、という循環定義になってしまうだろう。だからT文は雪が実際にどうなっているのかは関知しない。雪が白くあるという事実が「雪は白い」を真なるものにするのではない¹⁶。その証拠に、もし何らかの異変で雪が黒くなくても、「雪は白い」の真理条件が雪が白いことであることにはかわりはない。だからこそ「雪は白い」はこの場合偽となる。「雪は白い」は、雪が白い世界の中で真であるのと同じ理由で、雪が黒くなってしまった世界では偽なのである。

一般に、タルスキ流の真理定義は真理条件 p について、当の文 'S' 以上に明らかにはしない。われわれが「雪は白い」が真理であるということについて知っているすべては、われわれが雪が白いと知っているということに尽きるのであって、それ以上でも以下でもない。クワインの言葉を借りれば、タルスキ的な真理は「透明」なのである¹⁷。T文の意味論的に不毛な印象はそこから来る。

ではT文は、けっきょく何を教えるのか？「雪は白い」のような文を有意味に話すわれわれにとって、このT文そのものを否定することは、事実、できないということ、もし否定するなら、そのとき必然的に「雪は白い」は雪が白くという意味でなくなる、ということ、これである。自然言語の使用者であるわれわれが決してその外に出ることのできない事実上の限界を、それは指し示しているのである。T文自身の真理性を否定する人はもはやその文の使用者とは見なせない。だからこそ逆に、仮定的なT文の検証によって他者の言語を理解するという「根元的解釈」も可能となる。

しかしこのことは言い換えると、いかなるT文も、それ自身の真理性については何も告げない、ということに等しい。「雪は白い」という文が真であるのはどういうことかをT文は教えるが、なぜ「雪は白い」が雪が白い場合その場合に限り真なのかということの理由は教えない。タルスキ的に定義された「真理」はたしかに透明だが、あまりに透明すぎて、なぜそんなものが真理なのか、その真理についての真理がわからないのである。T文自身の真理性は、もっぱら言語使用者たるわれわれ自身がそれを否定できないという自然必然的な事実性によって示されるほかない。この意味で、あらゆる真なる文について定義される「透明な真理」は、いわば「わけのわからぬ不透明な真理」を隠しており、このオプスキュアな真理を抑圧した上に成り立っているのである。

いま原始T文に戻れば、この抑圧はまさに主体自身の存在に関わっていることがわかる。意味不明の‘ ϕ ’は大文字の他者の声の中と、その真理条件に自己同一化した主体の側、つまりあちらとこちらで反復されるというただそのことによって、まったく意味的資源ゼロのままに意味作用を生み出す。その意味作用はしかし、 ϕ の反復的な差異そのものなのだから、主体がそれを言おうとすれば意味不明の‘ ϕ ’を音声模倣的に繰り返すか、意味不明の自分自身を「そのとおり、 ϕ なり」とむなしく肯定するか、そのいずれかしか仕方がない。それは言語の内部では決して言い表すことのできない「意味」、不可能な「意味」なのである。このことは言い換えると、「しかり、真なり」と肯定する大文字の他者の意図はまったく「わけがわからない」ものとして現れるということ、そしてそれと相即して、子供は決して言えない不可能な「意味」としてその言語世界の中に存在し始めるということである。タルスキ的な真理概念が本質的に含意するこの原初の抑圧を、ラカン「私、真理は語る…」という言い方で示そうとしていた。

「この言い方はただ、真理について、そして真理のみについて語るべきすべてを言おうとしているだけである。すなわち、メタ言語は存在しない（これはすべての論理実証主義を位置づけるための主張である）。いかなる言語も真について真を言うことはできない。なぜなら真理は自らが語ることに自らを基礎づけるからであり、真理はそれ以外にどうしようもないからである。」¹⁸

この「真についての真なるものの欠如」にこそ、ただしく「原抑圧」を位置づけるべき場所がある、とラカンが続ける。これは前節で示唆した ϕ の反復における「差異」に相当するものと見なすことができるだろう。

【主体の隠喩としての真理】

真理が原抑圧を伴うということが本当だとして、子供はその先どうなるのだろうか。経験的観察が教えるところでは、ある時期、子供は爆発的な言語習得の進展を見せる。驚くべき好奇心と情熱だ。原抑圧をこうむった子供にいったい何が起きているのだろうか？

タルスキ流の真理定義に戻ろう。たとえば、「雪は白い」が真なのは雪が白い場合その場合に限る、というT文は、当然のことながら「雪は白い」が真であることの定義をするだけで、他の真と見なされる文、たとえば「私は頭痛がする」の真理については定義しない（「私は頭痛がする」が真なのは、話し手が話しながら頭痛がする場合その場合に限る、というふうに別なT文で定義しなければならない）。言語には、複雑な文を作る基礎となるこうした多くの真なる文が存在すると考えられるから、すべてのT文は総体として真理の外延を定義する。言い換えれば、どのT文も真理の部分的定義であって、それを他のすべてのT文とともに生成する真理理論を前提にしているということだ¹⁹。

仮定された原始T文も、それがT文である以上、やはり真理の部分的定義にすぎない。それは真理のすべてではない。実際、子供はいったん言葉の存在に気付いてみれば、母親が後続して様々な文を言っているのに気付くだろう。子供からすれば、こうした文はすべて、他者のうちで相互に関連して全体論的な知の体系をなしていると見えるだろう。さもなければ、母親がさまざま文をどれも真と見なしながら繰り返してくることが、理解不能になるからである。こうして、原始T文の出現は、大文字の他者の場所における全体論的な知の体系の想定を伴わずにいないと考えられる。デイヴィドソンの言え、タルスキの真理規約Tをみたす真理理論に相当するような知の体系が、その内容について不明のまま他者の場所に立ち上がるのである。「知っている」と想定された主

体」²⁰ とラカンが呼ぶものは、この想定された知の担い手としての大文字の他者にほかならない。とすれば、原初の ϕ の反復が強いる「私は大文字の他者の場所で可能なのか？」という問いに対して、子供がこの「知」にとりすがって回答を求めることは確実である。聖書風に言えば、大文字の他者よ私はここにおります、私にお望みのことを話してください、というわけだ。人間の欲望は「大文字の他者の欲望の欲望」であるとラカンが言っているのは、このことであろう²¹。こうして子供は爆発的な言語学習活動に送り込まれる。そのうち「原初の言われたこと」は表面的には忘れ去られるか、他の諸々の文の間に取りまぎれてしまう。

だが、この「知」には構造的に奇妙なところがある。もしこの「知」がすべてのT文を生成するのであれば、原始T文もまた生成できるのでなければならない。ところが仮定から、原始T文が与える真理条件 ϕ こそ、言語すなわち知が言うことの不可能なものであった。したがって ϕ についての知は、この知の体系の内部になければならないと同時にあってはならないことになる。したがって、大文字の他者に想定されたこの知は、子供にとってはあるようなないような永遠に未決着の回答にならざるをえないはずである（ラカンもそう考えて、このことを大文字の他者の記号Aに抹消線を引いて示している）。

このことは、「原初の言われたこと」に後続して解釈されるすべての文が、「大文字の他者の場所で私は可能なのか」という原初の問題を保持しつつ先送りする、ということの意味している。すべての真なる文は、言うことの不可能な主体の「意味」を暗示しながら先送りする。「シニフィアンとは、ある別なシニフィアンにかわって主体を代表するものことである」というラカンの定義は、このことを言っているのだろう。言い換えれば、真理条件が現れるあらゆるT文が、すなわち真理のあらゆる部分定義が、主体の不可能な「意味」の隠喩になる、ということだ。ラカンの格言を引けば、「真理のすべてを言うことはマテリアルに不可能である、言葉が足りないのだから。不可能であればこそ真理は現実的なものにくっついて離れない」²²。真理は主体の隠喩である。そしてその隠喩は、常に同じものを暗示するだろう。真理をなかば言うだけの大文字の他者と、主体は断絶している。この断絶がラカンの「無意識」の定義である。いわく、無意識とは、デカルト的主体、すなわち「我思う」と言うこと

のできる生物である主体と、「パロールが真として肯定されるために必要な次元」としての大文字の他者との、その両者のあいだにある「現実的な断絶」である²²。

【結 論】

冒頭のT文に戻ろう。

「雪は白い」が真なのは、雪が白い場合その場合に限る。

「雪は白い」は雪が白いことだということはわかった、でも、そんなふうに「雪が白い」の真理を言うことで、あなたは何が言いたいのか？ 以上の考察からすれば、子供がひっかかっているのは、大文字の他者へのこんな疑問であると推測される。経験的観察が教えるように、子供はしつこく「なぜ？」を繰り返す。われわれがT文に何か釈然としないものを感じるのは、このつまずきが今また反復されているからであろう。ラカン的に見るとき、デイヴィドソンの「根元的解釈」に隠されていたのは、こうした真理の隠喩化という問題であったことがわかる。

以上、われわれはデイヴィドソンとラカンの交錯点を探ってきた。そこに見出されたのは、主体の隠喩としての真理という、ラカン-デイヴィドソンの観念である。まさに言語を解するようになるがゆえに、主体にとって「真理」と「大文字の他者」は構成的でなければならない、そして主体はこの結果として「原抑圧」をこうむる—これがわれわれの結論である。およそすべての言語使用者がこうした大文字の他者の想定された真理権能と知に寄生して成立している限り、彼らが自分の知っていること以上のことを聞いたり言ったりするとしても不思議はない。ラカンにとってそれは無意識の問題であった。デイヴィドソンにとってそれは意味論における真理概念の原始性、意味の自律性の問題であった。実際、真なる文を見分けるさいにわれわれの前提している信念は、そのすべてが知識であるとは限らない。われわれはその文の真理性がどのよう

にして主張可能になるのか認知せずとも、すでに真としてそれを受け取っている⁴⁾。その真理を宣言しているのはわれわれではなく、けっきょく誰にとっても他であるような、言語そのものなのである。

注

- 1 デイヴィッドソンの論文集『真理と解釈』（野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳、勁草書房、1991=Donald Davidson, *Inquiries into Truth & Interpretation*, Oxford University Press, 1984. 以下、Davidson, *Inquiries* と略記し、原書のページと併せて邦訳のページを括弧内に併記する）に収められた第一論文、「意味の理論と習得可能な言語（1965年）」の表題が示すように。ただし、この論文は邦訳では割愛されている。ちなみに、ラカンの論文集『エクリ』（Jacques Lacan, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966. 以下、Lacan, *Écrits* と略記）は、その第一論文の書かれた翌年に出ている。
- 2 ただし、大澤真幸にコミュニケーション論の観点から両者を結びつける試みがある。大澤真幸『意味と他者性』勁草書房、1994, pp.334-336.
- 3 Davidson, *Inquiries*, pp.133-136 (pp.133-136).
- 4 「われわれに必要なのは共有された意味、概念、信念に関するいかなる想定も行わない翻訳ないし解釈の理論なのである。」Davidson, *Inquiries*, p.195 (p.208).
- 5 「通常、言語を持つことは主に話す能力にあると考えられている。しかし、以下では、話すことは間接的な役割しか果たさない。私の議論にとって本質的なことは、解釈者、すなわち他者の発話を理解する人、という観念である。私の考えでは、以下で述べられる考察は、話し手自身が他者の解釈者でなければならない、ということを含意している。」Davidson, *Inquiries*, p.195 (p.170).
- 6 Davidson, *Inquiries*, p.125, p.132 (p.122, p.131).
- 7 「T - 文の形式によってすでに暗示されているのは、真理という性質を持つ文に弁別的に対応している諸存在者を発見する必要なしに、ひとつの理論によって真理という性質を特徴づけることが可能だということである。」Davidson, *Inquiries*, p.70 (p.64). 「根元的解釈は、意味についての知識も信念についての詳細な知識も前提と

しない証拠に、依拠しなければならない。よい着手点は、ある文を真と見なす態度、その文を真として受け入れる態度である。もちろん、これはひとつの信念であるが、すべての文に適用可能な単一の態度であり、われわれが様々な信念をきめこまかく識別して区別できる必要があるような信念ではない。それは、解釈を始める前に解釈者にもおそらくそれと認定できると認めてよい、ひとつの態度である。というのも、ある人物がある文を発話する際に真理を表明しようと意図していることを、解釈者はそれがどいういった真理なのかについて何の観念を持たずとも、知ることができるであろうからである。」 Davidson, *Inquiries*, p.135 (pp.134-135).

- 8 Davidson, *Inquiries*, p.134 (p.133).
- 9 Davidson, *Inquiries*, pp.129-130 (pp.127-129).
- 10 Davidson, *Inquiries*, p.139 (pp.140-141).
- 11 Richard E. Grandy, "What a Truth Theory Need Not Tell Us," in: Ernest LePore (ed.), *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Blackwell, 1986, 179-189, p.179.
- 12 Lacan, *Écrits*, p.808.
- 13 *Ibid.*
- 14 *Ibid.*
- 15 Lacan, *Écrits*, pp.805-809
- 16 アルフレッド・タルスキ「真理の意味論的観点と意味論の基礎」飯田隆訳、「現代哲学基本論文集II」勁草書房, 1987, p.84. デイヴィドソンもこの点を強調する。「なにもものも、つまりどんな事物も、文や理論を真にはしない。」 Davidson, *Inquiries*, p.194 (pp.206-207).
- 17 W.V. Quine, *Pursuit of Truth*, revised edition, Harvard University Press, 1992, p.82. デイヴィドソンはまさにこの点に、意味理論への逆転の期待をかけている。「その理論は、ここの文が真となる条件について何も新しいことを示しはしない。その理論は、これらの条件を当の文それ自身よりいっそう明らかにするわけではない。」 Davidson, *Inquiries*, p.25 (p.13).
- 18 Lacan, *Écrits*, pp.867-868
- 19 Davidson, *Inquiries*, pp.201-202 (p.,.218)
- 20 Cf. Jacques Lacan, *Le séminaire livre XI: Les quatre concepts*

fondamentaux de la psychanalyse, Seuil, 1973, pp.209ff.

21 Lacan, *Écrits*, p.814.

22 Jacques Lacan, *Télévision*, Seuil, 1974, p.9.

23 Lacan, *Écrits*, p.839

24 「残念ながらわれわれは、すべての真なる信念が知識である、という美しくて心地よい結論を引き出すことはできない。なぜなら、すべての信念はある程度正当化されているとはいえ、その中には、正当化が十分でなかったり、あるいは正しい仕方では正当化されていないため、知識とならないものもあるからである。信念が真であることの一般的な推定根拠は、われわれの信念がすべて偽であることがなぜ不可能であるかを示すことによって、標準的な懐疑論からわれわれを救い出すのに役立つ。しかしそれは、知識であるための条件を特定するという仕事を、ほとんど手つかずのまま残している。私は本稿で、証拠による支持についての規範（そのようなものがあるとして）は取り上げず、ただ、ある信念の証拠あるいは正当化と見なすべきものはすべて、その信念が属するのと同じ信念の総体から来るしかない、ということを示そうとしてきたのである」。Donald Davidson, "Coherence Theory of Truth and Knowledge," in: Ernest LePore (ed.), *op.cit.*, p.319 (デイヴィドソン「真理と知識の斉合説」丹治信春訳、『現代思想』1989, vol.17-7, p.186)

なお、本稿の最初の発想は第53回社会哲学研究会でおこなった口頭発表「真理と主体— デイヴィドソン、ラカン」（1999.3.27 大阪大学文学部）に基づいている。当日およびその後いただいた多くの有益なコメントに感謝したい。

(山口大学人文学部教授)